

4) 社会学

1979年に復活された中国の社会学は、84年に至っても、その研究・教育体制の整備が着実に進められている。

84年の時点で社会学専攻課程を設けている大学は、学部レベルが4校(北京大学, 南開大学, 中山大學, 上海大學文學院), 大学院レベルが5校(北京大学, 南開大学, 中山大學, 華東師範大學, 中国社会科学院研究生院)となっている。また84年5月には、待たれていた自国の社会学者の手になる教科書「社会学概論(試講本)」, さらに12月には解放後初の社会学辞典といえる「社会学簡明辞典」も刊行された。

学術団体も拡充され費孝通(中国人民政治協商会議全国委員会副主席)を会長とする中国社会学会は、その下に医療社会学研究部会, 老人問題研究部会など専門領域ごとの分科会を設置して、随時研究活動を行っている。また各地方にも学術団体が組織されつつあり、84年9月には甘肅省社会学会, 11月には雲南省社会学会が結成された。

国際交流も定着化しており、84年5月5日には上海市で三浦文夫(日本社会事業大学教授)による社会福祉に関する講演会が開催されたほか、富永健一(東京大学教授)は11月初旬から12月末まで南開大学において経済社会学を中心とする短期集中講義を担当した。

応用社会学の展開

政策科学の一翼を担うとされる中国の社会学は、実証主義を強く志向している。したがって応用社会学の各領域に力が注がれている。

なによりも研究業績の「数量的に」多い領域が家族社会学である。中国で唯一の社会学専門誌「社会」(隔月刊)は84年の1年間に全部で103篇の学術論文を掲載したが、家族社会学に関する論文はその内28篇を占めている。それらの内には、王格「農村万戸、専門農家の家族関係調査」(84年4期)をはじめ生産責任制導入後の農村にお

る家族構造の変容を扱った研究も少なくない。また瀋陽市の離婚事例1000サンプルを分析し、それらの類型化を試みた趙子祥「離婚原因の多種多様」(「社会」84年2期)も興味深い。

家族社会学に属する分野ではあるが、「婚姻」問題に関する研究も活発である。顧叙「結婚紹介所と婚姻の価値指向」(「社会」84年6期)では結婚紹介所における成婚率は2%にすぎないとされている。また、他地区の結婚紹介機関に比べ格段の成績をあげている上海市の事例を分析した劉紅月「20%の結婚紹介成功率はどこから来るか——上海市青年宮“青春パーティー”語」(「社会」84年3期)などもある。

老人問題をはじめ社会保障に関する研究は引き続き盛んであるが、84年には従来はみられなかった「社会保険」制度を取り上げた研究が発表された。上海の集団所有制企業の社会保険に関する陳如風「知識青年合作社の養老・医療社会保険実施情況調査」(「社会」84年2期)と、農村の社会保険を論じた王勛「農村老年保險推進への若干の構想」(同84年3期)がそれらである。

保健・医療社会学の調査・研究は劉宗秀を筆頭に、黒竜江省などをフィールドとして展開されている。また、論文では金徳初「医療社会学の独自性と交差領域」(「社会」84年3期)が発表され、従来は不明確であった医療社会学の枠組がこの論文によって初めて規定された。このほか83年10月に江蘇省無錫県で実施された医師・患者関係調査の結果もその一部が公開されている。

産業社会学の領域では、武漢市社会学会が84年6月15日と16日の両日、「青年労働者問題学術討論会」を開催し、劉中榮をはじめ40名以上の研究者・実務家が出席した。従来この領域に関する研究業績は多くなく、今後が期待されるところである。

また、社会学の研究視座を一般社会の生活実感に近づける試みも行われており、唐仲勛「江南地方における茶館の社会的機能を語る」(「社会」84年4期)などが1例である。また84年12月に著書「社会学趣談」を公にした新進社会学者の顧曉鳴は、そのほかに日本のテレビドラマを題材とした「大島茂

と3人の不幸な女性——“赤い疑惑”の社会学的分析」(同84年6期)を発表している。「社会」誌上ではこれに続いて日本映画「蒲田行進曲」と同じく「男はつらいよ」の比較分析も行われる予定である。

小城镇, 大問題

さきの費孝通による論文「小城镇, 大問題」(「瞭望」84年2期から7期に連載)は、現在この問題に関する研究が中国社会学最大の課題であることを示している。

「小城镇」とは、県人民政府の管轄下にあり、その周囲の農村地域において、政治・経済の中核となっているコミュニティを意味し、それは中国全土で3200以上を数えるという。

この「小城镇」が研究対象として重視されているのは、農村工業化の過程において、「小城镇」に工業を導入し農村地域の余剰労働力を、そのまま工業労働力に転用しようという社会開発の構想に由来している。この考え方を中国の社会学者は(農民の)「離土不離郷(農業を離れても、村を離れない)」と表現している。中国社会科学院社会学研究所は「小城镇」研究のために、調査対象地域を江蘇省南部に選定し、ほかの研究機関とともに大規模な調査活動を展開している。この「小城镇」問題に関しては、84年5月に刊行された費孝通の講演録「社会学的探索」に、「小城镇」研究を語る、「農村工業化の道」など数篇の講話が収められている。さらに続く6月に刊行された費孝通2冊目の随筆集「雑写乙集」にも、それに係わる若干の記述がみられる。「小城镇」研究というコミュニティ・スタディが中国社会学の当面する課題となっている。

また「コミュニティ(中国では「社区」)」概念自体にも、理論的方面から分析が加えられている。上海大学文学院は84年6月13日に「コミュニティ討論会」を開催し、そののち討論会の成果を反映して、さきの顧曉鳴、ベテランの祝端開などによるコミュニティ概念に関する論文が発表された。中国社会学界の84年は「コミュニティの年」でもあった。(田辺義明)